

入選

初めての親切

東京都 牛込仲之小学校 6年 菊池 建

「この席どうぞ。」

ぼくはこの瞬間をずっと待っていた。

そのときの胸のドキドキと、初めて人に席をゆずることができたうれしさは、今でもはっきりと覚えている。

小学校に入学して初めての夏休み。ぼくが父の入院している病院へ、電車とバスを乗り継いで一人で通っていたときのことだった。バスの中で、ぼくの定位置は運転手さんのうしろ。そこに座っていれば、当時一年生だったぼくに、運転手さんが病院に着くころをいつも教えてくれたからだ。

ある日、いつものように運転席のうしろに座っていると、たくさんの人が乗ってきた。そして、座れずに立っている人も何人かいた。そのときぼくは（チャンスだ）と心の中でそう叫んだ。ぼくの席の近くに立っていたおばあさんに、

「この席どうぞ。」と思わず声をかけた。おばあさんは目を丸くして、

「いいのよ。」と言った。

ぼくは聞こえなかったのかなと思い、もう一度、

「この席どうぞ。」と少し大きな声で言ってみた。

するとおばあさんはやさしい笑顔で、

「まだいいのよ。でもありがとう。」と言って座ってくれた。

横にいた運転手さんも、ぼくの顔を見て笑顔でうなずいていた。ぼくはずっと、この言葉を言ってみたかったのだ。

車を持っていないぼくの家族は、休日によく電車やバスを使って出かけていた。父は席が空いても立っていることが多い。母も電車やバスが混み出すと、お年寄りに席をゆずっているのをたくさん見てきた。

母はよく、「人間は鏡の法則だよ」と言う。自分が相手に対して笑顔でいたら、笑顔になってくれる。やさしくすればやさしさを返してくれる。逆に相手に対して悪いことをすれば、必ず自分にはね返ってくるという法則だ。一年生だったぼくは、席をゆずれたうれしさとバスの中で興奮していた。父や母のいる病院に行き、早くこのできごとを伝えたい気持ちでいっぱいだった。父が入院している病院へ着くと真っ先にこの話をした。父はうれしそうに、「元氣もらったよ。ありがとう。」と言ってくれた。母も「成長したね」と言って喜んでくれた。

ぼくが家族以外にした、初めての親切。六年生になった今から考えると少し背伸びしすぎてしまったかなと恥ずかしくなってしまう。しかし、ぼくがした親切でまわりの人たちが笑顔になってくれたこと、そのときぼくが感じたうれしかった気持ち、また父や母がそのときにかけてくれた言葉は今でも忘れず心の中にある。

小さな親切だったが、ぼくにとって一生忘れられないできごとになった。母が言っていた鏡の法則。小さな親切が親切となつてつながり、笑顔あふれる世の中になるよう、ぼくはこれからも親切を広めていこうと思う。